アインシュタインに共感すること

D生生H28　古野　綾太

2013年4月　生命体工学研究科博士後期課程　生体機能専攻　入学
2016年4月　生命体工学研究科博士後期課程　生体機能専攻　修了

●はじめに

明専会の皆さま、2016年生命体工学研究科博士後期課程を修了しました古野綾太です。この度は会報誌へ執筆の機会をいただきありがとうございます。後輩の皆さんには聞きなれない方も多いかもしれませんが、私は社会人として働きながら大学院で博士号を取得しました。企業に勤めながら、再び大学へ進学した経験から参考になるようなことを書ければ幸いです。

【経歴】
2008年4月　㈱三井ハイテック　入社

●学部を卒業し企業に就職

当時、企業における採用活動は、就職氷河期の採用抑制と団塊世代の定年退職などを背景に、就活状況は売り手市場でした。そのため、私も含め大学院に進学せず企業に就職する学生は多い印象でした。実際、入社した同期の数は80名程度と多く、ほどよい緊張感をもって過ごしました。私は専攻分野が化学であったこともあり、入社後は、半導体に関わる内部配線材（リードフレーム）を扱う開発部門へ配属となりました。そこでは上司や先輩から指導を受けながら、仕事に慣れることに必死だったことを思い出します。そういった日々を繰り返しながら気持ちにも余裕ができてきた頃、ふと「このテストをするのはなぜだろう？」と疑問を持つことがありました。結果、その「なぜ」の先には目的があり、それを達成するためにテストをしていることがわかりました。皆さんはあたりまえと思うかもしれません。しかし、この「目的」は意外と見落としてしまうことが多く、手段の目的化と言われています。よく挙げられる具体例としては、ドリルを買いに来る客はドリルが欲しいわけではなく、あくまでも欲しいのは穴であるという話です。これから企業に就職あるいは研究者として社会に出ていきます。その中で、問題に対し思い悩み立ち止まることがあるでしょう。その時は、もう一度「目的」を考えてみてはいかがでしょうか。自然と解決案が見つかるかもしれません。

●社会人として大学院へ進学

企業で働き始めて3年が経過すると、自分で考え仕事を進めることが多くなってきました。とは言え、上司や先輩に対し仕事内容の報告・連絡・相談が基本となり、指導や判断を受ける形は変わりません。そのような立場であった私の転換期が大学院への進学でした。既に社会人として博士号を取得された先輩から、体力的にも精神的にも苦しかった話を伺っており不安であったことを覚えています。進学の話は進み、学部卒でしたが社会人博士の制度を活用し、九州工業大学の生命体工学研究科へ入学しました。仕事と博士課程の両立は大変でしたが、できる限り研究室へ通いました。その理由は、私の研究室へ行く時間が平日の仕事を終えた遅い時間、あるいは休日にも関わらず、多くの学生が熱心に活動しており、切磋琢磨できる環境であったことが大きいです。そして、学部卒ということもあり博士論文の執筆活動に至るまでは苦労しましたが、その経験が私の考える力の土台となっています。最近では、書籍に加えオンラインのセミナーや講義など、簡単に知識を得られる手段も多くなりましたが、実際に経験しなければ得られないものがあることも事実です。是非、皆さんも積極的にチャレンジし、そのような環境に身を置い

てみてはいかがでしょうか。

●学位取得後の仕事

3年間の博士課程を終え、その成果を会社に報告しました。その当時、漠然と博士号取得によって何かが変わるのではないかと期待していましたが、主な仕事内容は変わらず、お客さま対応として、技術プレゼンする機会が多くなったぐらいです。それからも、国内から海外のお客さまに携わるようになったぐらいで、特に仕事内容に変化はありませんでした。今思えば浅はかな考えです。私に求められるのは学位ではなく、その過程を修了した私が生みだす成果だからです。そもそも学位の博士号は日本語表記ですが、英語ではDoctor of Philosophy（略Ph.D.）の表記となります。Philosophyは哲学という意味で、あらゆる物事を深く考察する学問や理念を指し、物事に対する基本的な考えができる人と理解できます。学位取得後にそのような考えを持っていたことを反省し、成果を出すために、考え学び続けています。これから社会の変化がますます速くなるなかで、変わらず企業の存在価値は社会課題を解決することにあります。そして、その手段が学問だと考えます。皆さんも、学び続け、一歩でも半歩でも前に進んでもらえたら嬉しいです（一歩でも、半歩でもは、お世話になった先生から頂いた言葉です）。

●現在の仕事

入社してから15年が経過し、企業では中堅と呼ばれる世代となりました。入社時から変わらずリードフレームの技術開発をしていますが、新しい取り組みや違う業務にもチャレンジしています。その中で、今でも多くの気づきや学びがあります。私も多々ありますが、抽象的な言葉を使うことです。例えば、「清潔感がある人」と説明した場合、ある人は髪型を連想し、別の人は服装を連想するかもしれません。これでは伝えたいことが伝わりません。より具体的な言葉で説明することが重要となります。また、解決したい問題を提起する場合は認識を共有することも重要です。私が「ガソリン価格の上昇は問題だ」と提起した場合、車に乗らない人にとっては問題ではありません。そのため、車に乗る人は～、通勤で毎日車に乗る人は～などを付け加える必要があります。これらは、プレゼンなどで説明する際に重要となります。ビジネスだけでなく学会なども同じです。皆さんも意識してみてはいかがでしょうか。私のように苦労することが少なくなるはずです。

●㈱三井ハイテックについて

ここで、私が勤めている企業について、少し紹介させてもらいます。㈱三井ハイテックは1949年1月に創立。北九州に本社を置き、金型、電子部品、電機部品、工作機械の製造・販売を行っています。国内・海外に事業所と営業拠点を持ち、従業員4538名（2023年1月末現在連結）のグローバルな企業です。高度な精密加工技術を基幹技術とし、事業展開しています。例えば、皆さんがイメージしやすい製品として、ハイブリッドカーに搭載されているモーターコアや電子機器の制御に欠かせない半導体パッケージの内部配線材（リードフレーム）が挙げられます。それら製品を直接目で見る機会は少ないかもしれませんが、自動車、産業機械、家電、エレクトロニクスなどの分野で発展に貢献してきました。これは当社の使命である「世界の人々に役立つ製品をつくる」を念頭に活動してきた結果であると思います。これからも、産業の発展、ひいては人々の豊かな生活に広く貢献できる企業を目指していきます。当社に興味がありましたらご連絡をお待ちしております。

●おわりに

皆さんに伝えたい内容を勝手気ままに述べてきましたが、それは書籍に書いてあります。しかし、経験して得た知識や教訓であるからこそ、私の成長の糧となっています。アインシュタインの難しい理論はわかりませんが、「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にいい方法はない」は大変共感できます。皆さんも、是非、チャレンジし、体験してください。必ず自分の成長に繋がります。